

資 料

家庭科教育における教育実習生に望まれる資質能力

小澤 滋子*1 尾崎 沙和子*2 櫻井 純子*3

Necessary Abilities and Aptitude for a Student Teacher of Home Economics

Shigeko OZAWA*1, Sawako OZAKI*2 and Junko SAKURAI*3

The authors found that practical aptitudes and skills are needed in the teacher education in Japan, in addition to the important role of practice teaching in teaching courses at university.

The authors found that the school teachers of home economics in secondary education wanted the student-teachers to acquire an understanding of the home economics content that they teach with some teaching skills and the lives of their pupils in their schools.

Also the authors made clear that the school teachers of home economics taught the attitudes and aptitudes as a teacher, how to communicate with pupils and the meaning of home economics to the student-teachers in Kagawa Nutrition University.

はじめに

平成15, 16年度では, 本学紀要論文において, 家庭科教職課程履修学生に関する教育実習への意識及び実習後の意識変容を見てきた。平成17年度は, これまでの検討内容, 結果をふまえ, 教育実習事前指導等を中心に改善を図り, 指導・実施をしてきたところである。

本稿は, まず, 今日のわが国の教員養成政策において何が注目されているのか, 教員としての指導力の重視という動向を見るとともに家庭科教諭としてのあり方を考え, 教育実習のもつ意味にふれた。この一般論を深めるために, 現実に家庭科教育実習生に対して, 中・高等学校の担当指導教諭が, 実習生としてあるべき姿をどのように考えているのか, また教育実習生として事前に身に付けることが望ましい資質能力は何か, などについて調査や記録等にもとづき明らかにした。本稿は, I. 学校現場で求められる教員の資質能力, II. 家庭科教員の教育実習生に対する要望, III. 家庭科指導担当者が本学実習生に求めているもの, の三部で構成した。これらに用いた資料は, 主としてIでは教育職員養成審議会答申等, IIでは中・高等学校家庭科教員への「質問紙による調査」結果, IIIでは本学学生の平成15年度「教育実習録」における指導担当教員による記述である。

本稿は, 研究の途上であり, 資料の分析もまたそれに

つながる考察も十分なされているとは言えない。しかし, 現時点で明らかになっている研究成果を公表することは, 今後の「教育実習指導」の改善, 工夫に資する意義あるものと考えている。なお, 今回は教科(家庭科)指導を中心としてまとめた。

I. 学校現場で求められる教員の資質能力

1. 教育職員養成審議会答申における教員の資質能力

平成9年に建議された教育職員養成審議会答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」は, 教員に求められる資質能力を(1)いつの時代にも教員に求められる資質能力, (2)今後特に教員に求められる具体的資質能力, (3)得意分野を持つ個性豊かな教員の必要性, の3つに分けて述べている。

(1)は, 教員である以上はいつの時代にあっても一般的に求められるものとして, 昭和62年に示された同審議会答申「教員の資質能力の向上方策等について」における以下の箇所を踏まえている。すなわち「学校教員の直接の担い手である教員の活動は, 人間の心身の発達にかかわるものであり, 幼児・児童・生徒の人格形成に大きな影響を及ぼすものである。このような専門職としての教員の職責にかんがみ, 教員については, 教育者としての使命感, 人間の成長・発達についての深い理解, 幼児・児童・生徒に対する教育的愛情, 教科等に関する専

*1 教職第一研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Teacher Education I, Kagawa Nutrition University.

*2 教職第二研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Teacher Education II, Kagawa Nutrition University.

*3 家庭科教育学研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Home Economics Education, Kagawa Nutrition University.

門的知識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力が必要である」とする点である。

(2) では、変化の激しい時代の中で、未来に生きる子どもたちを育てる教員には、以下の資質能力が求められるとする。まず、「地球的視野に立って行動するための資質能力」であり、そこでは、「地球、国家、人間等に関する適切な理解」、「豊かな人間性」、および「国際社会で必要とされる基本的資質能力」があげられている。次いで、「変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力」であり、その中には、「課題解決能力等に関わるもの」、「人間関係に関わるもの」、および「社会の変化に適応するための知識および技能」が含まれる。最後は「教員の職務から必然的に求められる資質能力」であり、「幼児・児童・生徒や教育のあり方に関する適切な理解」、「教職に対する愛着、誇り、一体感」、および「教科指導、生徒指導等のための知識、技能および態度」が取りあげられている。

(3) では、教員には多様な資質能力が求められているが、すべての教員にこれらを一律に高度に身につけることを期待することは現実的ではないとして、むしろ、多様な資質能力を持つ個性豊かな教員に構成される集団が連携・協同することの重要性を述べる。そして、教員の資質能力は固定的なものではなくそれぞれの職能、専門分野、能力・適性、興味・関心等に応じてその向上が図られる必要があり、その力量の向上は、基本的には日々の教育実践や教師自身の研鑽によって図られるものであると述べる。

また、このような資質能力を培う基盤となる大学の教員養成の役割を平成9年の教員養成審議会答申では、「専攻する学問分野に係る教科内容の履修とともに、教員免許制度上履修が必要とされている授業科目の単位取得等を通じて、教科指導、生徒指導に関する『最小限必要な資質能力』（採用当初から学級や教科を担当しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実施できる資質能力）を身につけさせる過程」として位置づけている。

この位置づけの是非を論ずることは別の機会にしたいが、ともかく今日の日本の教員養成に関する政策では、養成段階においてすでに、現場ですぐに役立つ実践力を求めていることが示されている。

平成17年の中央教育審議会のワーキンググループも素案として、実践的な指導力のある教員を養成するための「教員専門職大学院」の基本構想を示している。ここでは、現職教員を対象にして授業の質の向上を目指し研修を義務付けるとともに、学部の卒業生を「即戦力教員」に育てることを目指している。

これについてもさまざまな立場の見解の検討を必要とするが、ここでは教員養成の政策の今日の一つの傾向を指摘することにとどめたい。このような今日の流れにお

いては、養成段階としての大学における教育実習の役割は大きいと見ることができよう。

これに関連しては、大学側は学校現場と連携を図り教育実習生に学校教育の理解を深めさせること、また本学家庭科教職課程の教育実習事前指導ですでに取り入れてきたように、授業展開に関連したビデオ教材を教育実践に即して指導すること等を通じて、教員としてのあり方、教材研究をすることの意味、教育方法の工夫の重要性を学生に理解させることは、一定の意味をもつものであろう。

2. 教員に求められる指導力

平成13年、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の一部改正以来、「指導力不足教員」が問題になっている。文部科学省によれば、平成16年度指導力不足として認定された教員は566人となっている。指導力不足の判定は都道府県各教育委員会に委ねられている。文部科学省の調査ではその定義づけをしている教育委員会は平成15年現在47、今後定める予定としているのは12となっている。定義づけの例として、例えば、次のようなものがある。

<A県教育委員会の例>

1. 教員としての指導力

- ① 学習指導
授業が成立しない
- ② 生徒指導
児童生徒との信頼関係が築けない
- ③ 学級経営等
児童生徒の掌握ができず、学級をまとめられない

2. 教員としての人間性・社会性・資質

- ① 責任感に欠ける
- ② 学校運営への参加意識に欠ける
- ③ 協調性に欠ける
- ④ 勤務意欲に欠ける
- ⑤ 公務員として不適切な言動がある

3. 疾病等

<B県教育委員会の例>

- ① 教科の専門知識が不足
- ② 指導方法が不適切
- ③ 子どもの心を理解する能力や意欲に欠ける
- ④ 教育活動を進める上で教員の責任を果たせない

定義づけや措置についての問題点の分析は別の機会にすることにして、ここでは、今日の教員には、教科の指導力、生徒理解、勤労意欲、よりよい人間関係をつくる能力が望まれていることの指摘にとどめたい。以下に、家庭科教員としてのぞまれる資質能力についてふれたい。

3. 家庭科教員としての資質能力

家庭科は、生活の自立について学び、生きる力を身に

つける教科である。私たちの生活は、人、物質、金銭、時間、空間などが関連しあっているものであり、また、個人や家族の生活、地域社会、環境との相互関係の上に成り立っている。そのため家庭科は、授業を通して生活を総合的に把握し、単に知識や技術に留まらず意欲・態度の総合化を図る能力を育てるために、実践的・体験的な学習を中核として学ばせている。

小・中・高等学校の教科「家庭」の目標をみると、生活に必要な知識と技術（小学校では技能）の習得、実践的な態度の育成という点で共通している。

家庭科の教師としては、このような教科のねらいや特性を十分理解し、教科内容についての知識や技術を目的にそって的確に身につけている必要がある。教育実習生としても、家庭科教育のねらいの実現を図る観点から生活に関連する理論を実生活に活用する能力や生活課題を発見し、解決する手立てを実践する能力を習得して教育実習の場に臨むことが重要であろう。

これらは、今回、家庭科教員の質問紙法による調査においても、また本学の教育実習生の教育実習録においても、指導担当教員から改善すべきこととして指摘されるものでもある。具体的には以下のⅡ、Ⅲでふれることにしたい。

Ⅱ. 家庭科教員の教育実習生に対する要望 —質問紙法による調査から—

平成17年の7月から8月にかけて、高等学校ならびに中学校の家庭科教員を対象とする研修会が本学坂戸校舎において実施された。「全国高等学校家庭科講習会・7/25～27」には高等学校教員が60名参加した。「新産業

技術指導者講習会・8/1～5」には中学校教員が42名参加した。講習会の参加者、合わせて102名を対象に質問紙法により「教育実習生に対する要望」について調査を実施した。この調査では、85名の教員から回答（回収率83.3%）を得た。

回答教員の属性は以下のとおりである。

- ① 教育実習生の指導について「経験有」とする者は80%であった。
- ② それぞれの教員がこの5年間で指導した実習生の合計人数で最も多いのは「10名」であり、6割以上（66.2%）が「1～3名」であった。
- ③ 教員の経験年数は、6割以上（61.2%）が「16年以上」であった。

なお、この調査の対象者は、全国多様な大学や短大からの実習生の指導経験を有する家庭科教員であることから、ここから得られた結果は一般的な傾向であり、必ずしも特定のものではないことを付記したい。以下に、それぞれの項目に沿ってこの調査の結果と考察を述べる。

1. 教育実習前に学んでほしい事項

家庭科教員が実習生に、実習前に学ぶことを期待している事項について割合の高い順に図1に示した。最も数値の高いのは「礼儀・作法（言葉遣い等）」（71.8%）であった。次いで割合の高いのは「学習指導案の作成方法」（69.4%）であり、それに次いで「家庭科教科書の理解」（49.4%）、「学習指導要領の理解」（41.2%）と続く。また授業に関しては、大学における「模擬授業の体験」（29.4%）と共に、「発声や話し方」（25.9%）、板書の仕

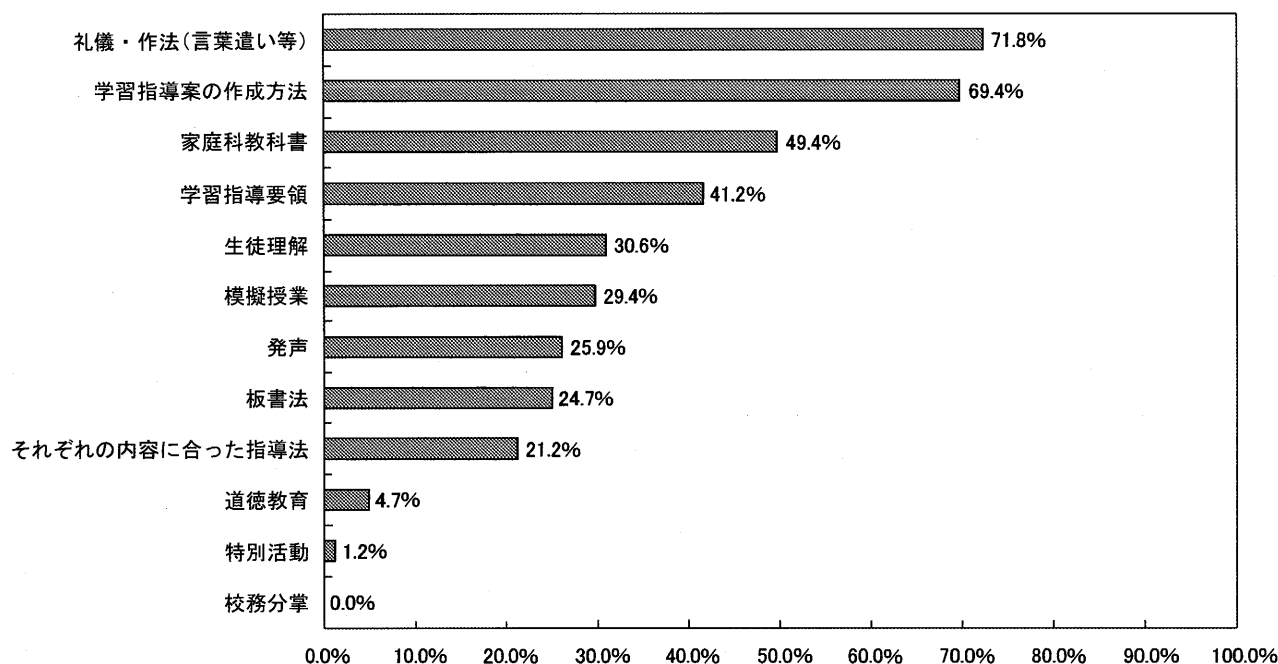


図1 教育実習生が事前に学んでほしいこと（複数回答）

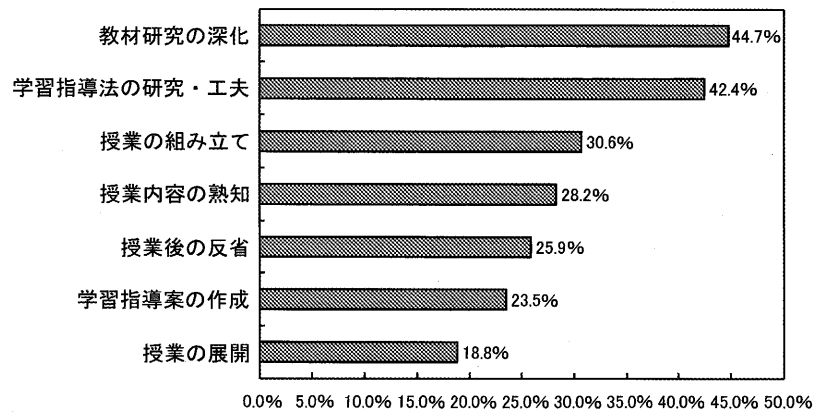


図2 教育実習生の授業に特に望まれること（複数回答）

方」（24.7%）も、ほぼ4人に1人の割合で要望している。

「その他事項」には「教師にふさわしい服装・身だしなみ」、「あくまでも実習させていただくという心構え」、「母校実習のためか言動に甘えやなれ合いの様子が見られる」、「専門以外の分野に関する教材研究が必要」等、具体的な記述もみられた。

これらの要望は家庭科に限らず、他の教科においても同様に教育実習現場の教員から示されていることは、小澤らの平成11年度科学研究費による調査でも明らかとなっている。実習に向かうということは、実際に授業を担当する際の力量ばかりではなく、言葉遣いをはじめ社会人としての態度・行動様式も求められていることがわかる。

2. 教育実習生の授業への要望

図2は、家庭科教員が「実習生の授業」について特に望む事項を、割合の高い順に示したものである。最も高いのは「教材研究の深化」（44.7%）、次いで「学習指導法の研究・工夫」（42.4%）であった。いずれも他の項目に比べて突出しており、10ポイント以上の差があった。両者は授業の実施にあたっては基本的な重要事項であり、指導教員として指導内容を間違いなく生徒に的確に教えてほしい、との強い願いを持っていることの現われであり、最も実習生の努力が望まれる事項と考えられる。これらに次いで「授業の組み立て」（30.6%）、「授業内容の熟知」（28.1%）、「学習指導案の作成」（23.5%）、「授業の展開」（18.8%）と続く。すべての項目が授業の構築に不可欠な要素であり、授業はそれらの要素が有機的に関連し合って実現するものである。学生は実習期間中に自らの実践を通じて会得していくことも多い。しかし、質の高い授業実践をめざすためには教育実習以前から実習に向かって実習生としての責任を果たす心構え、またそれとともに教材研究をはじめとする様々な準備が望まれる。

「授業後の反省」に対する要望は25.9%の教員が回答

している。大学側の指導としては、学生に自分の実施した授業を反省し、真摯な態度で自己評価をすることの重要性を受け止めさせ、その自覚を促す必要があろう。

3. 教員として望まれる資質・能力

図3は、教育実習生に対して望まれる資質能力に関する事項を、割合の高い順に沿って示したものである。最も高いのは「教職への関心や意欲」（65.9%）であり、それに次いで「仕事への責任感」（63.5%）となる。それに関連する項目の「積極性」（54.1%）や「自主性」（54.1%）は同数である。これらは、将来、教員を目指す学生に対して、教職への理解と意欲、そして責任感と積極性・自主性が強く望まれるのは当然の結果と考えられる。

第2位として割合の高かったのは「礼儀・作法（言葉遣い）」で62.4%であった。このことは、生徒に向き合う教育実習生として、状況を把握し自らの立場をふまえた適切な言動が強く望まれることの現われであろう。また「生徒とのコミュニケーション」も4位（57.6%）と、上位である。生徒と教師間の信頼関係は授業のためにも不可欠な条件である。その他、「指導教諭への連絡・報告」は44.7%、「時間・期限厳守」は43.5%となっており、これらはどのような職業に就いても社会人として求められることである。

これらについては、先に述べた1と同様の点が指摘できる。また、Iにおいては、教員の資質・能力としてその人間性・社会性が重要なものとしてあげられていたが、ここにおいてもそれは示されていることがわかる。

以上、本学で開催された家庭科研修会の参加者である高校・中学校教員の教育実習生に対する要望をみてきた。それらは、教員としての資質能力をはじめ教科指導に関すること等、幅広い分野に関連しており、様々な問題の解決を迫られる学校現場を背景にした、経験豊かな教員であるからこそその声ととらえることができよう。

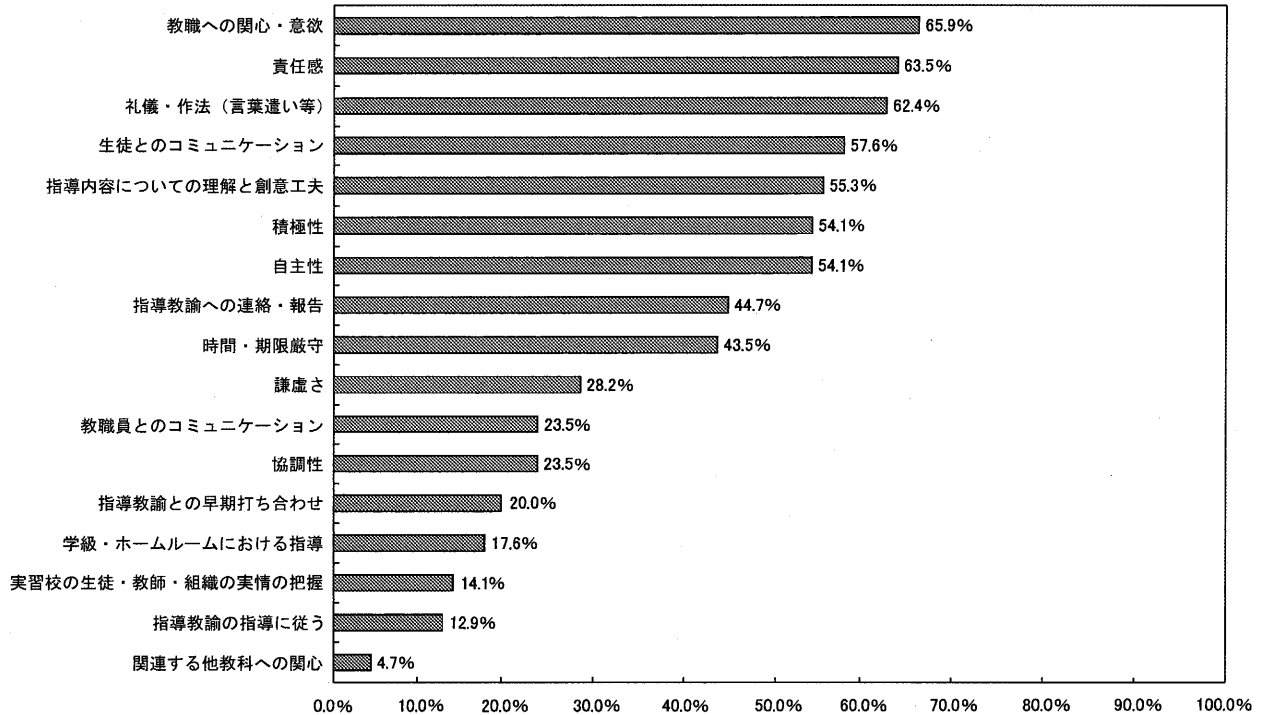


図3 教育実習生に望まれること（複数回答）

Ⅲ. 家庭科指導担当者が本学教育実習生に求めているもの

－教育実習録における指導担当者の記述から－

教員免許法改正により教育実習期間が、それまでの2週間ではなく3～4週間と延長され、教育実習の単位数も5単位として実施されるようになったのは、平成15年度の4年生からである。そこでは教育実習事前・事後指導も法規上明確に単位を示すことが要求されるようになった。本学においては、すでに単位増以前より教育実習の重要性を考慮して、事前指導には教育実習についてのビデオ視聴、家庭科の中等高等学校の教員となっている卒業生に特別講師を依頼するなど実習生に学校現場の実情の理解を図ること、模擬授業を取り入れ教育実践に必要な力を培うことをねらいにプログラムを組み実施してきた。それは実習単位2単位に相当するものであった。このような多様なプログラムの中で学生は学んだとしても、また日頃教職課程の科目の中で経験したはずの模擬授業であったとしても、実習校での自分の授業では必ずしも円滑に進まなかったことを、教育実習報告会で触れる学生も多い。実習期間中、学生は指導担当者から適切な指導を得ることによってこそ、日々の自らの授業実践を振り返り、成長している。そのことが実習記録の中で示されている。

指導担当教員は、どのような事柄をそれぞれの実習生に求めているのか、その内容は重複する部分も多々あり明確に分類することは難しいが、大別すると、1教師としてのあり方、2生徒に対する教育的愛情、3家庭科の

特徴の理解とその授業の展開、となる。これらは、教師に望まれる力として本稿Iで述べた、教科の指導力、生徒理解、よりよい人間関係をつくる能力にも関連している。以下、上記項目の順に平成15年度の教育実習録（62名）における具体的ないくつかの記述を示す。平成15年度は教育実習期間が延長されて実習した本学最初の実習生である。それぞれの記述について、どのような状況のもとでなされたのか、それを学生はどのように理解し、自らの次の授業に繋いでいったのかの分析はケース・スタディの様式を考えている。それを示すことは今後の課題であり別の機会に譲ることにし、ここでは、上述の観点から整理した、教員による記述を示すことのみにとどめたい。なお、平成16年度、17年度の実習録における教員の記述は整理の段階であり、これについての分析も機会をあらためたい。

1. 教師としてのあり方

- ・教師という仕事は何10年やっても、毎日が勉強です。指摘をされた所は、その都度反省し、改善する努力をして下さい。「学習態度の理解度」をはかる作問にも、着目が欲しいですね。
- ・教室整備も大切な担任の仕事です。“気づく”，教師に欠けてはならないことです。
- ・授業も、教える内容は同じでも、アプローチの仕方は、いろいろあります。自分なりに、あるいは仲間と話し合い、または先輩にアドバイスをしてもらい、よりよい方法を工夫していく……この繰り返しですね。
- ・この職業はさまざまな仕事をこなしてゆかなければなら

らないが、やっぱり授業が一番大切である。授業の教材研究をしっかりとやって、一生懸命やれば、必ず生徒に伝わり、喜びを得ることができ、それがまた次のエネルギーになるということを体験できた一日だったのではないでしょう。

- ・仕事は、教わるのではなく盗むものであり、またまねではなく、自分のやり方を見つけていく日々だと思えます。……生徒は幼児から高校生まで、みな若い教員が好きです。好かれようとするのは、意味のないことですが、好かれていないとついてきてくれません。人間をみがいてゆくことが教員のもう一つの大きな仕事です。
- ・教師としてやらなければならないことは数限りなくあります。(生活指導の面などで)しかし、一番大切なのは「教科指導」です。教科指導をしっかりと行なうことができれば、生徒指導やその他の指導もうまくいくようになります。

2. 生徒に対する教育的愛情

- ・人間関係作りに積極的になりましょう。……授業以外の場面(休み時間、給食、清掃、放課後など)で、なるべく教室にいて、生徒の様子を見たり、声をかけるように努力することがポイントです。子ども達も輪に入って欲しいと思っていますので、一歩前に踏み出してみましよう。
- ・どの生徒にもよいところが必ずあります。悪いところはすぐ目につきますが、良いところは見えにくいものです。いけないことは、いけないときちんと言わなければなりません、その子のよいところをたくさん見つけそれを伸ばすためにどうしたらよいか、いつも考えるようにしています。逆によくないことに気付かせる為に、どう声をかけたらよいか、どう努力させたらよいか、その子に合った指導をさがすためにも、その子を知ることが大切だと思います。
- ・先生が話かけてくれると、反応はどうであれ、嬉しいようです。
- ・中学生ということもあり、生徒たちはまだ様子を見ているようですが、話かけてみてください。いろいろな話をしてくれます。一個人として、向き合っていくことの大切さを実感できると思います。
- ・子どもはいろいろな顔をもっています。一面だけを見て判断しないようにしたいものです。家であったこととか、部活のとき、友達とのトラブルなどなど、解決してあげることができないけれど聞いてあげられるといいです。

3. 家庭科の特徴の理解とその授業の展開

- ・アミノ酸価の部分に苦労していたようですね。説明順序をもう一度整理しておきましょう。
- ・家庭科は人の生き方も一緒に考えていく教科だと思っています。

- ・調理実習は、途中まで、続きは次回。というようなことはできないので、時間をよむことが重要である。かといって、急がせることばかり考えると、失敗や、事故につながる危険があるので難しい。これは経験をつんでいくしかないが、生徒は、自分より3~4倍時間をかけるものだと思って、献立や準備、説明をすることが大切だと思います。
- ・食生活分野での調理実習の位置付けが必要です。実習内容と理論を結びつけることにより、実習も教室での座学にも生きてきます。常に実際の生活に結びつけられるよう具体的例を示し、理解させる必要があります。……授業の流れ(ねらい)を生徒にしっかりと理解させ、授業にメリハリをつける必要があります。
- ・家庭科はいかに最新のデータを教えられるかがキーポイントになっています。身の周りのことを勉強する科目なので間違いのないことを伝えられる事が生徒を授業に引きつけることにもつながると思います。
- ・調理実習ではまず全体を第一に考えて下さい。また、時間内に終了すること、食べられるものを作ることを常に心がけることも大切です。被服製作では個人差が必ず出てきます。「前回よりここが良くなったね」「この縫い方はうまい」と一言誉めることができるようにひとりひとりを大変ですがよく見つめてみましょう。
- ・講義形式の授業では、その組み立てによって生徒の意欲が大きく変わります。どんな順序で進めるか、考えを深めさせるためにどんな言葉がけをするのか、生徒の態度に応じて準備することが大切です。生徒の声をしっかりと受けとめ、活かせるように努力しています。授業をする際に、工夫してみるといいですね。
- ・生徒が自分で考えられるよう、具体物を示したり、生徒の言葉を整理してまとめてあげたり、個によって支援の仕方も変わります。個に応じた支援の方法を考えることが大切です。最初はうまくいかなくて当然です。少しずつ考えて、いろいろな言葉がけをしてみましょう。
- ・授業全体の雰囲気として、生徒に考えさせる場面、発表させる場面、教師が話をする場面等、メリハリをつけられるようにすると思います。発問の仕方、指示の出し方によって生徒の反応も随分異なりますので、工夫してみましよう。
- ・食物分野よりも高齢者の生活の方が難しいかもしれませんが。まずは、正しい知識を、正しい情報をたくさん取り入れて、その上で、生徒に伝えたいことをまとめ、授業に組み立てていく、そのようなつもりで取り組んでみて下さいね。
- ・授業をする時、どこに視点を置いて行なうかを明確にしてのぞむと、時間に流されないで(時間に追われないで)できると思います。
- ・教師が一方的に進める授業はよくないですね。「生徒に考えさせること」とても大切なことです。できるだけ多く授業をみせていただいて、学んで下さい。

- ・生徒の反応を確かめながら表現方法を上手く使って授業を進めていくことは、とても大変だと思います。まず、自分が余裕を持つこと。予備知識をたくさんもっていることなど、そして、生徒を知ることも大切だと思います。生徒達がうまく授業に反応した時には、その気持ちをずっとこちらに向けていられるよう工夫してみてください。
- ・「自分が生徒だったら、今の話はわかっただろうか？」を考えながら、進めていってはどうでしょうか？先生は、教えているクラス分何度も同じ授業ができますが、生徒達は一度きりの授業内容ですので、失敗をできるだけ少なくする努力（教材研究）をし、精一杯行なって下さい。
- ・選択食物の授業は少人数なので生徒の反応をみやすいという利点があります。その利点を生かして授業を行なって下さい。授業については初めてで緊張するでしょうが、何度もイメージトレーニングをして下さい。あとは授業中、生徒の反応をもっと身近に感じてほしいですね。遠慮せずに生徒のまわりを歩き、やっているプリントをのぞきこんでみて下さい。
- ・何回授業をしても、反省点がないということはありません。同じ単元でもそうです。何度も何度も失敗して、改善するということを繰り返して、少しでも分かりやすい説明を心がけていますがなかなかうまくいきません。生徒にとってはたった1回の授業です。自分の持てる力をその時間に出しきりたいものですね。授業は毎日が新しい指導改善の場です。今回の経験を更に深められることを希望いたします。
- ・生徒に考えさせるようにすることは大切だけれど、結果としてついてくるような気がします。例えば、写真などの教材で考えるヒントにしたり、実習などの体験や参加型の授業で生徒同士の学び合いの中で、自然と生徒は自分のこととして考えるようになると思います。
- ・生徒は色々な面を持っています。授業の中でいかに引き出すか、ゆさぶるか、刺激するかという事は、「発問の工夫」によってなされます。発問も含めた教材研究を進めていただきたいと思います。
- ・SHRでも授業（課題・教材）でも、盛り沢山すぎると生徒にはわかりづらくなったり、自分も混乱してしまったりします。ポイントをしっかり把握し、「この時間の『主（メイン）』は何なのか」を常に意識してゆきましょう。また、話術を研究しましょう。
- ・どんな授業内容（教材も含めて）を保障できるのか、そこには自分なりの授業観を持つこと、つまり家庭科を通して、何を生徒たちに伝え、考えさせ、それが生活していく上で役立つものになっているかだと思います。常に自分なりにチェックをしていく姿勢が大切だと思います。
- ・指導案を立て、授業の流れを整理し効率を高めるのは大切な作業です。しかし、指導案通り進むことは決してありません。1時間の中で必ず生徒に定着させたい内容を外さないこと。それを第一に考えましょう。そして指導案は教師のためでなく、生徒のためにあることを忘れてはいけません。
- ・授業では指導案、板書計画などの大切な計画ができていなかったため、一方的に話すばかりで生徒の参加が全く見られませんでした。プリントの穴うめだけで、説明も不明確で理解できない生徒も多かったようでした。教員側は何度もある授業ですが、生徒にとってはあの授業は1度きりです。自覚を持って授業に臨んで欲しいです。
- ・家庭科の授業では作業がはじまると、どうしても私語が多くなり、一斉指導が難しくなります。授業の始めに静かな状態でその日の目標や要点を簡潔にまとめ、指示を徹底させる必要があります。授業見学では自分ならどういう発問・指示をするなど、課題意識を持って授業を見て下さい。
- ・説明が多くなると生徒はあきてしまいます。説明が続く時には、マーカーを持たせて重要な所に印をつけるようにする等、工夫が必要だと思います。また、説明が長くならないようにするには、プリントを一読させ、班で重要な所を話し合わせ、発表させながらポイントだけをおさえるのもよいと思います。
- ・調理実習の場合、実習が始まってしまうと細かい部分までは指導してられないので、事前の説明の段階でポイントについてはしつこいくらい説明したほうがよいと思います。しつこいくらい説明しても本番ではほとんど忘れられているというのが現実ですが。全体に説明しても、最終的には1:1にならないと理解してもらえない生徒が増えているので指導は大変です。
- ・授業の雰囲気作りは先生のやり方に影響する所が大きいように思います。……どんなに経験を積んだ教員でも完璧という授業は少ないということです。十分に準備をするということはもちろんですが、その場の状況に応じて、臨機応変に対応しなければいけないという場面ででてくるということも頭に入れておいてください。
- ・プリントはわかりやすいということが大切。資料として読ませるプリント以外は内容の配置など工夫するといいですね。指導案はそれを見ることで、生徒・教師の動きが分かるもの（想像できるもの）が望ましいといえます。実際に授業をやってみて変更する部分が出てくるかもしれませんが、予め考えておくことで、どこがその授業のポイントになるかが見えてきます。
- ・タイミングをつかみ、全員の生徒の様子をみながらペースを進めることが大切です。私語が多いのは何か原因があるはず…。又、私語に走る生徒のみを見ていたのでは、片手落ちです。あなたの情熱で皆の気持ちを捉えて下さい。
- ・緊張感あふれる授業は、生徒にとっても新鮮でありとても印象深いものとなったようです。……今回の課題

「……どんな工夫があるだろうか。」と問いかけているのですから、『なんでこんな味がうすいのだろう』『なんで豆腐が入っているのだろうか』というところに着目できるとさらによかったのではないかと思います。生徒の考えを上手にひろってあげてください。

- ・家庭科はいろいろな教科・科目が複合された非常に間口が広い科目です。他の教科の授業見学も多いに勉強になったことと思います。

以上から、Ⅰ、Ⅱで指摘したような、教科の内容を理解しそれに沿った指導方法を工夫する努力の態度、その能力、生徒とコミュニケーションをとる能力などが求められていることを読み取ることができよう。

おわりに

本稿から、日本の教員養成政策の中で求められていることおよび学校現場で教育実習生に望んでいる事柄が明確になった。

学生は大学での学習により、専門的知識の理解を深めてはいるが、それらの中・高等学校の授業のレベルに合わせて自分のものとし、自らの授業実践の中に組み入れる努力が不足していることを指摘する学校現場の教員の声も少なくなかった。家庭科教育の特性からも大学で受けた教育を、より現場の状況に対応して位置づけ、学問

的に学んだ事柄を生活実践の場に応用発展させる能力を身につけさせる必要性を確認することができた。

学生は教育実習を経験することで、その人間性を成長させているが、「教員の職責」にてらし、教育実習前においても社会人としての望ましい人格を培っておくことが求められていることが明らかとなった。学生の自覚を喚起することが重要となっている。

教育実習体験によって学生の一層成長を図るためにも、本稿で明らかになった課題を解決するカリキュラムの改善をめざし、教職課程教育を充実させていきたい。

なお、本稿は、日本学術振興会の平成17年度科学研究費補助金の助成による研究成果の一つである。

参考文献

- 1) 櫻井純子, 天野幸子, 尾崎沙和子, 小澤滋子, 板谷幸恵: 女子栄養大学・家庭科教職課程履修生の教育実習に関する考察. 女子栄養大学紀要, 34, 101-113 (2003)
- 2) 小澤滋子, 天野幸子, 尾崎沙和子, 板谷幸恵, 櫻井純子: 女子栄養大学・家庭科教職課程履修生の教職に関する意識の変容に関する考察. 女子栄養大学紀要, 35, 89-101 (2004)
- 3) 櫻井純子: 「家庭科教職の資質能力」 中間美砂子編著, 『家庭科教育法—中・高等学校の授業作り』. 建帛社所収, (2005)
- 4) 小澤滋子: 『新版教師論テキスト』. 女子栄養大学, 1-55 (2005)